

歴史を超え、未来へ

産官学連携のしおり

Guide for a Collaboration between Industry, Government and Academia

DoRIS

Doshisha Women's College of Liberal Arts
Research Interchange System

2025



同志社女子大学
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Founded in 1876



知と協働による 社会共創の拠点へ

同志社女子大学は、6学部11学科、大学院5研究科および1専攻科を擁する女子総合大学で、2026年に創立150周年を迎えます。

「いつの時代も、新しきを生きる。」という理念のもと、時代の変化にしなやかに対応しながら、新たな挑戦を続けています。

本学では、多様な専門分野をもつ研究者が、産官学の連携を通じて社会のさまざまな課題に取り組み、企業・行政・地域と協働して新たな価値を創造しています。

これからも、長い歴史に培われた知の基盤と新しい発想を結び、持続可能で豊かな社会の実現に貢献してまいりますので、よろしくお願い申し上げます。



同志社女子大学 学術情報部長
奥田 紫乃

外部資金獲得状況

共同研究・受託研究受入実績（2022年度～2024年度）

共同研究	所属・職・氏名	研究課題等	機関名
	学芸学部／教授／和氣 早苗	ソニフィケーションを活用したサイン音のデザイン研究	三菱電機株式会社
	現代社会学部／准教授／新谷 龍太郎	子ども食堂へのQRコードなどを利用した食品管理システムの開発	今池子ども食堂：ゴリゴリ
	薬学部／教授／喜里山 暁子	CBDの生体利用率を向上させる配合因子の探索および新規水溶性化CBD製剤の開発	C&H株式会社
	薬学部／教授／松元 加奈	再生不良性貧血におけるウサギATG+シクロスポリン+エルトロンボパク療法の有用性に関する検討（W-JHS AA02）	一般社団法人九州臨床研究支援センター
	生活科学部／教授／小切間 美保	食に関する家庭科授業による生徒の調理経験と食事観、自尊感情の関連性の研究	京田辺市
	生活科学部／教授／村上 恵	アルカリイオン水を用いた各種の調理時の物性への作用研究	パナソニック株式会社 くらしアプライアンス社
	生活科学部／准教授／森 紀之	食品中の難消化性成分が腸内細菌活動に与える影響に関する研究	株式会社上野忠
	生活科学部／特任教授／西村 公雄	野菜の保存条件の違いがおいしさに及ぼす影響について	パナソニック株式会社 くらしアプライアンス社
	生活科学部／特任教授／西村 公雄	貯蔵条件が食品のおいしさに及ぼす影響に関する研究	パナソニック株式会社 くらしアプライアンス社
受託研究	所属・職・氏名	研究課題等	機関名
	現代社会学部／教授／天野 太郎	京田辺市における新しい観光マップの作成を通じた地域理解の促進を目指す実践的研究	京田辺市
	現代社会学部／教授／日下 菜穂子	高齢者向け音楽ワークショップの検証	公益財団法人 東京都歴史文化財団 東京文化会館
	現代社会学部／准教授／新谷 龍太郎	こども食堂を拠点としたインクルーシブ・コミュニティの創造	京田辺市
	薬学部／教授／前川 京子	抗生物質の品質評価手法の開発および標準化に関する研究	国立研究開発法人 日本医療研究開発機構
	生活科学部／教授／杉浦 実	金時ニンジンにおける機能性成分含量の測定及び簡易評価法の確立	京都府農林水産技術センター
	生活科学部／教授／杉浦 実	質量分析法によるエダマメの葉酸成分測定条件の決定	京都府農林水産技術センター
	生活科学部／教授／杉浦 実	国産柑橘類の機能性成分含有量に関する調査研究、及び機能性表示食品制度への申請に向けた技術的支援業務	全国柑橘消費拡大協議会
	生活科学部／教授／真部 真里子	しょうゆの香りが呈味と嗜好に及ぼす影響	キッコーマン株式会社
	生活科学部／教授／村上 恵	食材の下処理または調理における酒類調味料（アルコール）の効果について	宝酒造株式会社
	生活科学部／教授／麻生 美希	21世紀・アイヌ文化伝承の森整備推進事業の内アイヌ文化振興にむけた観光学等の学術的・多角的観点からの調査研究	国立大学法人北海道大学

奨学寄付金受入実績 (2022 年度～ 2024 年度)

- ◎ 公益財団法人飯島藤十郎記念食品科学振興財団
- ◎ 株式会社ナールスコーポレーション
- ◎ 一般社団法人
医薬品医療機器レギュラトリーサイエンス財団
- ◎ 日本香粧品学会
- ◎ Eneco Holdings 株式会社
- ◎ 富士山天然水合同会社
- ◎ The Academy of Korean Studies
- ◎ 株式会社モトックス
- ◎ 住友ファーマ株式会社
- ◎ 株式会社理創化研
- ◎ 株式会社デキュロス

(社名 50 音順に記載)

研究プロジェクトから

こども食堂を拠点とした インクルーシブ・コミュニティ づくりの研究



現代社会学部 現代こども学科 准教授 新谷 龍太郎

研究 概要

京田辺市の令和4年度の市民満足度調査では、住み続けたい理由として「自然環境が良い」が上位に挙げられる一方で、「子育て環境が良い」「教育環境が良い」の項目は相対的に低い結果となった。こうした背景のもと、京田辺市が「子育て」「教育」に力を入れていることをより効果的に発信し、地域全体でこどもと家庭を支える仕組みを構築することが求められている。本研究では、地域の「第三の居場所」として注目されるこども食堂を拠点に、世代や立場を超えた共生コミュニティづくりの実践的研究を行った。

こども食堂は、制度の狭間に置かれた人々と「共に居る」ことを出発点とするボランティアな取り組みである。しかし、会場費や人手、補助金申請などの小さな困難が重なることで活動が途絶えてしまうことも少なくない。そこで、京田辺市大学連携地域貢献研究事業を活用し、市内のこども食堂運営者へのヒアリングを通じて課題を可視化し、これら課題について話し合うネットワークづくりを進めた。米を中心とした物価高騰を受けて食材支援も行ったが、食材を手渡す際に生まれるコミュニケーションがつながりを生む契機となる事も確認できた。また、自らもゼミ学生とともにコミュニティ・カフェ「悠隣館きらりSこどもカフェ」を運営し、現場実践を通じて課題を検証した。

そこで明らかになったのが、食材の保管・配送などの「物流課題」である。この課題解決のために今池子ども食堂ゴリゴリとの共同研究を行った。集められた食材をどのように管理し、各食堂へ効率的に届けるかという課題解決のために、物流企業・三菱ロジスネクスト社と連携し、現在も研究を進めている。また、同社は、2025年大阪・関西万博のテーマウィークのパートナーであり、「ウェルビーイング」や「生物多様性」などの地球的規模の課題に向けた対話型展示を企画していた。そこで、ゼミ生によるワークショップを開催する機会を得た。今池子ども食堂ゴリゴリの利用者も招き、障がいのある人や高齢者も在宅ワークで働ける物流社会を体験するために、被災地での物流支援をイメージしたフォークリフト遠隔操作の体験を行った。

このように、京田辺市からの受託研究により生まれたつながりから、今池子ども食堂との共同研究につながった。本事例は、こども食堂という地域の小さな実践が、大学や企業との連携を通して社会的な発信力を持ち、グローバルな課題とも接続しうることを示している。

産官学連携の意義

「こども食堂」は、個人の善意によるボランティアな活動として始まるが、その過程で行政や企業、大学とつながることで、社会課題の解決を生み出す可能性を持つ。地域に根ざしたこの取り組みは、教育・福祉・産業の枠を超え、人と人を結び直す「共生社会の学びの場」として機能している。大学が調査・人材育成を担い、企業が技術や資源を提供し、行政が制度的に支えることで、地域の小さな声を社会の変化へと結びつけることができる。こうした産官学の連携は、持続可能で包摂的な地域づくりのモデルを提示し、大学の社会的使命を体現する実践となっている。

意味を志向する 音楽心理療法による ケアの在り方



学芸学部 音楽学科 准教授 北脇 歩

02

産官学連携の意義

終末期医療や在宅看取りにおける音楽療法の効果を「生きる意味の志向を支える文化的実践」として社会的価値の中に位置づけたいと考えている。音楽体験を媒介とした支援モデルを構築し、医療・福祉・教育分野への還元を通じ、新たなケアの価値の共創を目指す。また、音楽療法士の倫理的実践能力を評価基準に組み込み、専門職教育への体系的な反映を推進し、行政や地域との協働を通じ、意味創造を基盤とする持続可能な共生社会の形成に寄与することを期待している。

研究概要

ヴィクトール・エミール・フランクルは、人間の最も根源的な欲求は「生きる意味を見出すこと」にあると述べている。人は過去・現在・未来のあらゆる局面において意味を見出し、価値を創造し続ける存在であり、その能力はいかなる状況下においても失われることがない。この「意味への意志」に基づく人間観は、支援や療法の根底に在る哲学的前提とも深く響き合うものである。音楽体験は単なる感覚的・情動的反応にとどまらず、対象者の内的世界と存在の根源に触れる創造的行為としての理解が求められる。音楽体験は、言語化されない感情や無意識の体験を媒介し、個人の深層心理へ即時的に影響するとともに、気づきや意味の再構築を促す機会となる。また、音楽を介した他者との関係性の形成や環境の構築、そういった「場」を創造することは、対象者が自己の存在意義や生の意味を新たに見出すための重要な基盤となる。支援者は単なる介入者としてではなく、対象者と共に「生きる意味」を探索し続ける伴走者としての在り方が求められる。こうした臨牀的かつ哲学的視座に基づき、音楽体験を通じた意味の創造と再構築の過程を理論的に検討するとともに、終末期ケアに限らず、生きることを支援する音楽療法士の実践的成長と専門性の深化を明らかにすることを目的としている。

障害のある子どもを巡る 現象学的研究



現代社会学部 現代こども学科 教授 勝浦 眞仁

03

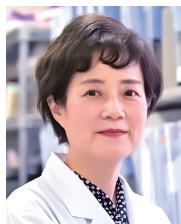
産官学連携の意義

深刻化する少子化を背景に、保育や教育現場のみならず、地域や社会全体でこども・子育て支援を考えることが必要不可欠な時代である。子育て支援の充実のために、自治体と大学とが連携することは、住みたい街としての市町村の魅力を高めることにつながる。また、ダイバーシティやインクルージョンといった特別支援で重視されてきた概念を企業において活用する産官学連携によって、新たな価値が創出された事業の展開が期待される。

研究概要

「共にある」という関係性に着目した特別支援教育、保育のあり方を考究している。これまで様々な学校教育や就学前施設の実践の場に関与し、発達障害（知的発達症を含む）のある子どもを中心に、配慮を要する幼児・児童とその子の先生や周囲の子どもたちとのやり取りをエピソード記述してきた。そして、対象としている子どもたちのみならず、私自身も含め、周囲の人たちの変容・成長を考察する研究を積み重ねてきた。その成果として、障害のある子どもと周囲の人たちとの間には相互主体的な関係を生み出していく難しさがあること、および、両者の間に生まれてくる「生きづらさ」を和らげていく「共に生きる構え」を私たちが持つ重要性を述べてきた。さらに、「共にある」ことを通して、他者に対する信頼と自身に対する自信という心の育ちが障害のある子どもに徐々に芽生えてくることや、周囲の人たちも障害のある子どもに自信をもって前向きに教育・保育や子育てをしていけることなどを見出し、障害のある子どもと周囲の人たちが「共に育つ」かたちを探っていく必要性を主張してきた。これらを見現化する試みとして、障害のある子どもとその親のwell-beingに関する研究を行っている。

液胞型プロトン・ポンプ機能と糖尿病に関する研究



薬学部 医療薬学科 教授 和田 戈虹

04

研究概要

糖尿病は、血糖値が慢性的に高くなる疾患であり、特に2型糖尿病は我が国でも患者数が増加しており、生活習慣病として社会的影響が大きい。インスリンは膵島β細胞から分泌され、血糖値を下げる重要なホルモンであるが、加齢や肥満、生活習慣の変化により、インスリン分泌量や作用が低下すると血糖制御が乱れ、糖尿病が進行する。我が国では、糖尿病患者は約1000万人と推定され、医療費や合併症への対応が大きな課題となっている。

液胞型プロトン・ポンプ (V-ATPase) は、インスリン分泌顆粒の内腔を酸性に保つことで、インスリンの成熟・分泌に重要な役割を果たす酵素であり、そのa3サブユニットはβ細胞における分泌顆粒の輸送に不可欠である。a3サブユニットの欠損や機能低下は、インスリン分泌能を低下させ、血糖制御の異常を招くことが示されている。V-ATPase a3サブユニットの機能解明は、糖尿病の予防や新たな治療法開発に向けた有望なターゲットとなりうる。本研究は、膵β細胞におけるインスリン分泌機構の理解を深め、糖尿病治療の基盤を提供することを目指している。

産官学連携の意義

糖尿病治療の進展には、基礎研究で明らかになった分子機構や細胞内輸送の知見を、臨床応用へと橋渡しすることが不可欠である。大学や研究機関で得られたV-ATPase a3の役割に関する知見を企業が医薬品開発や新規治療技術に応用することで、患者に安全かつ効果的な治療法をより早く提供できる可能性が高まる。産官学連携は、基礎科学の成果を社会や医療現場に迅速に反映させるための重要な枠組みであり、糖尿病対策の加速化に貢献することを期待する。

胃切除後がん患者の食生活の自己管理支援に関する研究



看護学部 看護学科 准教授 小笠 美春

05

研究概要

胃がんで手術を受けた患者は、胃の解剖生理学的変化で生じる術後障害により、QOLの低下を余儀なくされる。そのため、患者にとって胃切除後障害の予防と対処は避けることができない課題であり、患者は食生活を自己管理しながら社会生活を営んでいくことが求められる。患者が食生活を自己管理していくためには、胃切除後障害の身体症状を予防・対処する治療上のマネジメント、家庭や地域、職場での社会的役割を調整する役割マネジメント、精神的ストレスなどの否定的な感情を調整する感情マネジメントが重要となる。そこで、患者個々の状況に応じた自己管理支援を行い、患者自身が自分に合った対処方法を見出すことができるよう、患者の食生活の自己管理スキルの獲得に着目し、「胃切除後がん患者の食生活自己管理スキル尺度」を開発した。

これまで患者の自己管理スキルを客観的に評価できる指標は限られており、適切な支援の個別化が課題であった。胃切除後障害の症状や食生活は個人差が大きいため、対応に苦渋することも多い。本尺度により患者の自己管理スキルの特徴を把握し、退院指導や在宅支援における介入方針を明確化できると考える。今後は本尺度を活用し、自己管理支援の標準化と継続支援体制の構築を目指す。

産官学連携の意義

胃切除後患者の食生活自己管理支援における産官学連携は、科学的根拠に基づく支援内容を社会実装し、患者が退院後も継続的に自己管理できる環境を整えるために重要な意義を持つ。学術機関は科学的根拠を基盤に支援方法を体系化し、行政は地域での栄養・生活支援体制に導入できる。さらに産業界は、ICTや補助食品などを通じて患者が日常的に自己管理を継続しやすい環境を提供できる。三者の協働により、患者の生活に根差した継続的な食生活支援が実現することを期待する。

越中の人々と木曾義仲・平家物語 に関する基礎的研究

―地域資料・絵画・芸能への展開を中心に

(2025年度奨学寄付金：富山県・高志の国文学館 高志の国プロジェクトより)



表象文化学部 日本語日本文学科 教授 宮腰 直人

研究 概要

本研究の目的は、越中（富山県）の人びとが木曾義仲や『平家物語』をどのように地域文化として受容し、いかに豊かに表現してきたかを解明し、その成果を広く発信することにある。12世紀後半、木曾義仲が倶利伽羅峠で活躍したいくさは『平家物語』や『源平盛衰記』に詳述され、越中の人々にとって地域の歴史を彩る重要な言説として扱われてきた。本研究では、近世の地誌や越中を訪れた人びとの紀行文を手がかりにして、あらためて木曾義仲にまつわる言説や表象を分析し、絵巻や屏風、絵馬といった絵画、あるいは幸若舞曲、古浄瑠璃等の芸能を視野におさめて、その地域的展開を明らかにする。従来、『平家物語』や『源平盛衰記』といった言語テキストとの関連で捉えられてきた事象を絵画や芸能との接点から問いなおす点に本研究の独自性がある。近年の視覚表象研究や歴史学の進展に目配りをしつつ、文化資源の再発見を試みる。

近年、富山県や小矢部市では、木曾義仲を観光資源として捉え、持続的な発信事業をおこなっている。そうした動向もふまえ、研究成果を通じて教育を含めた地域振興に貢献することも本研究の目的である。

産官学連携の意義

人文学の産官学連携の意義は、文化資源へのさまざまな取り組みによって、既存の認識を刷新し、新たな価値観を創造する点にある。人文学は、課題解決型の学問領域とは異なり、いずれもの分野が長期的に学校教育や博物館や美術館等の文化継承事業と結びつく可能性をもつ。少子高齢化社会をむかえつつある今日、社会連携の側面を多分に有する人文学は、新たな産官学連携のかたちを模索する上で重要な指標となる。

和食は健康事象や 持続可能性に貢献する



生活科学部 食物栄養科学科 教授 今井 具子

研究 概要

何をどのぐらい食べると疾病を防ぎ健康の保持・増進に役立つかは、人々の大きな関心事である。「○○を食べると体に良い！」などの情報はわかりやすいが、有益な部分と危険な部分をはらんでいる。近年の栄養疫学研究では、ひとつの栄養素や食品に注目するのではなく、どのような食品の組み合わせが健康の保持・増進に役立つのかを解明することが、ひとつの大きなテーマである。地中海式ダイエットやアメリカの健康的な食事などは食スコアが開発され、食べ方としての優位性が国際的に証明されている。しかし、世界無形文化遺産である和食の優位性の証明は、遅れているのが現状である。私たちは和食スコアを開発し、オープンデータを用いて、和食が国際的に肥満や、虚血性心疾患、総がんなどの死亡率、健康寿命に貢献することを証明してきた。また、温室効果ガス産出量、水や土地利用などの環境指標にも有意に関連し、和食が持続可能性に貢献することを証明してきた。今後は地中海食をはじめとする他のスコアとの関連や、コホートデータでの解析も進めていく予定である。また和食の研究とは別に、食事調査手法の開発、食の砂漠化の現状調査、地域での食育活動なども行っている。

産官学連携の意義

食は食物を作る農に始まり、加工、流通、販売、提供と大きな経済網の中で成り立っている。また、食は個々に必要な栄養を提供して完結するものではなく、環境、文化、歴史などの多くの側面が関連する。豊かで健康的な食を持続可能な形で提供するには、産官学がそれぞれの立場で食に関わることが求められている。大学で得られた知見を社会実装していくためには、産官学の連携が必要不可欠である。

同志社女子大学が紡ぐ、産官学連携と発展の連鎖

産官学連携メニュー

産 官 学 連 携

共同研究

学外機関の研究者と本学教員とが、契約に基づき、対等の立場で共通の課題について研究に取り組み、優れた研究成果を生み出すことを目的とした制度です。

受託研究

学外機関からの委託を受けて、本学教員が契約に基づき研究・調査・試験を行い、その成果を委託者に報告する制度です。

学術研究員

産官学連携事業等の推進並びに本学教員の共同研究活動支援の目的のため、本学において学術研究を希望する者を受け入れています。

学術研修員

産官学連携事業等の推進並びに本学教員の研究活動補助の目的のため、本学において学術研修を希望する者を受け入れています。

奨学寄付金

研究の奨励を目的とした寄付金を学外機関から受け入れています。

知的財産の活用

本学が保有する知的財産を産官学のあらゆる業界・地域社会に提供いたします。

地 域・社 会 と の 共 生

地域社会との交流

地域社会との連携体制をさらに強化し、教育・研究の成果を社会に還元します。

産官学連携のプロセス

学術研究支援課に相談



産官学連携メニューの紹介

- ◎教員と研究内容について打ち合わせ
- ◎契約内容について打ち合わせ



連携内容、メニュー、期間、金額を決定



申込書の提出



契約締結



研究開始

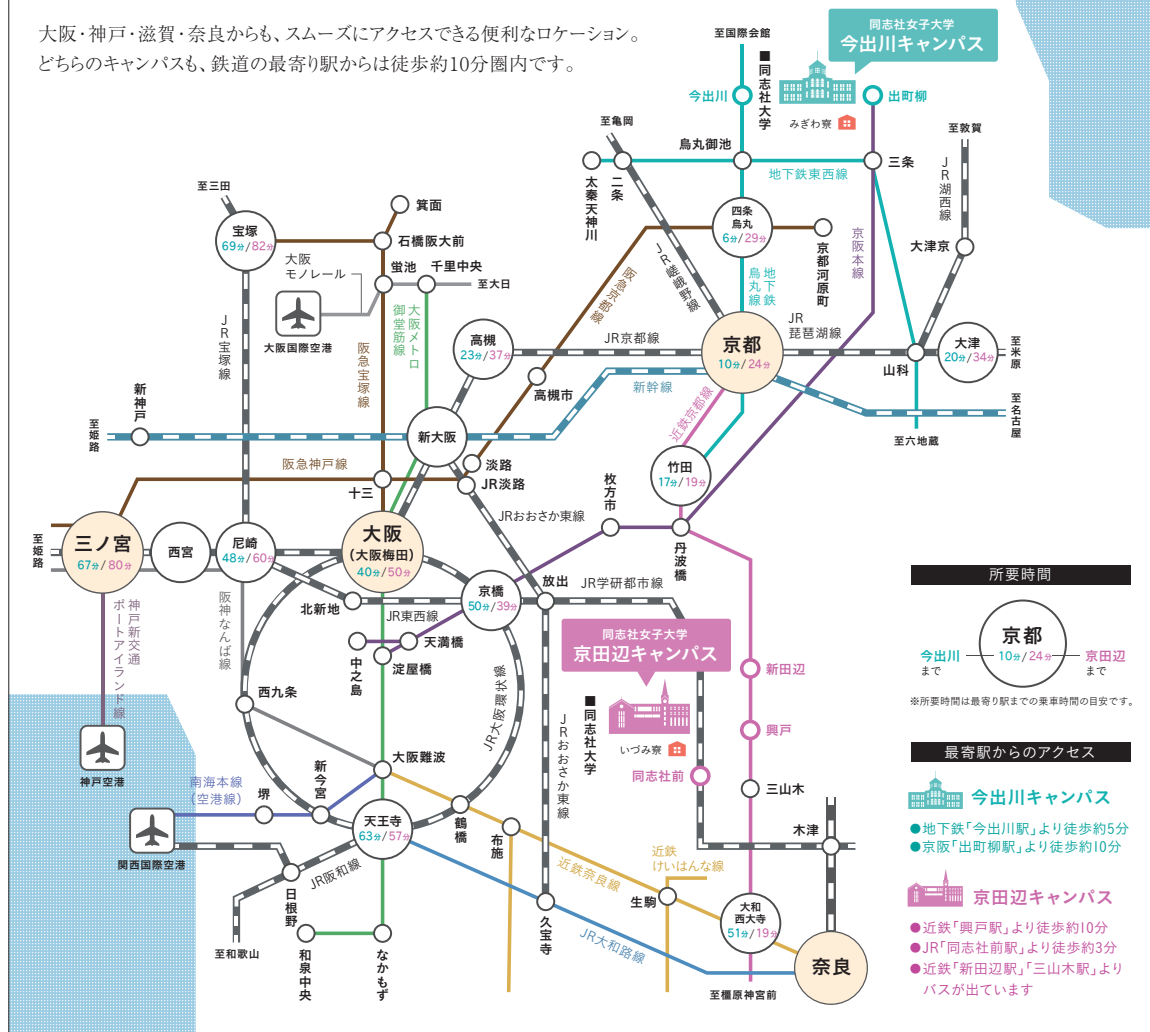


研究完了・成果報告



ACCESS MAP

大阪・神戸・滋賀・奈良からも、スムーズにアクセスできる便利なロケーション。
どちらのキャンパスも、鉄道の最寄り駅からは徒歩約10分圏内です。



研究者データベースの紹介

同志社女子大学の研究者情報は
本学Webサイト

同志社女子大学 研究者データベース

検索

<https://gyoseki.dwc.doshisha.ac.jp/dwchp/KgApp/>
にて検索できます。



同志社女子大学 学術情報部 学術研究支援課

[TEL] 0774-65-8455 [FAX] 0774-65-8680

[E-mail] research@dwc.doshisha.ac.jp